

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K21587

研究課題名（和文）地域での「共食の場」を通じた介護予防の効果 住民主体の活動における実践的研究

研究課題名（英文）Community Kyoshoku (eating together) - evaluating neighborhood activities effectiveness on healthy aging

研究代表者

木村 友美 (Kimura, Yumi)

大阪大学・大学院人間科学研究科・講師

研究者番号：00637077

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、独居高齢者の増加が深刻化する日本社会において、地域における「共食の場」として共食プログラムを構築し、その効果を分析することであった。2019年度に本課題が採択された後、共食プログラムの実践にむけて国内の2地域で準備を進めていたが、COVID-19感染拡大のため共食が困難になった。

コロナ禍における孤食は高齢者の健康に深刻な影響をもたらし、その状況を郵送アンケート調査等で研究を続けた。さらに、スマートフォンのLINEを用いた「スマホ食事クラブ」の介入を実施し、バーチャルでの食の共有においても、食欲や食態度（調理意欲等）の向上などの変化がみられたことを、質的・量的調査から示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、現代の日本社会で減少している「地域における共食の場」の介護予防としての効用や可能性を探求したものである。地域における新たな介護予防モデルの可能性を示すという点で、社会的な貢献度の高い研究である。感染症の拡大によって、高齢者の孤立や孤食がより深刻な課題となり、共食の意義を多角的に再検討するうえでも本研究の調査（感染症拡大下での高齢者の食生活の実態、食の共有の状況、バーチャル共食の効果）は意義のあるものであったと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to establish a communal meal program for older adults living in the community and to analyze its effectiveness. This project was started in FY2019, and preparations were underway in two regions in Japan to implement the communal meal program, but the spread of COVID-19 infection made it difficult to implement the program. Eating alone during the pandemic had a serious impact on the health of the elderly, thus, we continued to survey the health situation of the elderly in the community through mailed questionnaires. Furthermore, a "Smartphone Food Club" intervention using the LINE application was implemented, and qualitative and quantitative surveys showed that changes such as improved appetite and eating attitudes were also observed in the virtual sharing of food.

研究分野：フィールド栄養学

キーワード：孤食 共食 地域在住高齢者 介護予防

## 1. 研究開始当初の背景

団塊の世代が75歳以上となる2025年の現実を目指し地域包括ケアシステムの構築が進められてきた。少子高齢化を背景に、介護予防を地域ぐるみで担う必要性とその脆弱性が顕在化している。一方で、介護予防に向けた地域での取り組みは、主に「運動教室」などの運動機能に重点を置いたものが多く、住民主体の活動による介護予防効果についての検証は未だ報告が十分といえない。筆者らは「食を通じた介護予防」の可能性を探求し、国内外の地域在住高齢者を対象にフィールド調査を重ねてきた。高知県の農村地域では高齢者の33%が孤食であり、孤食の高齢者では食品摂取の多様性に乏しく、やせ傾向にあり、心理的健康度（QOL）が低いことを報告した（Kimura Y, et al. 2012）。また、文化人類学的なインタビュー調査により、家庭での日常の共食だけでなく、地域の祭事等における「非日常（ハレ）の食事」の共食機会の減少という変化が、高齢者の食や社会性に与える影響についても考察してきた。文化人類学的研究によって国内外でのフィールド調査を実施し、共食・孤食についての質的インタビューを通じて、日本の高齢者における家族との共食の困難さや、かつては頻繁に見られていた「地域の行事・祭事での共食」が現在ではほぼ見られなくなったという農村過疎地域の実態を明らかにした。独居高齢者にとって、デイケアの利用が唯一の共食となっている状況も浮かび上がってきた。以上の背景から、地域における共食の可能性に着目し、これを実践し評価するという着想に至った。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、独居高齢者の増加が避けられない日本社会において、家族に代わる「共食の場」として地域における共食プログラムを構築し、その活用実施を行うこととした。さらに、共食プログラムの介護予防への効果に関しては、栄養、心理、身体機能という包括的な健康度の指標を用いて疫学的手法を軸に分析する。また、介入前後において高齢者自身が共食をどのようにとらえ、食環境を含めた生活背景にどのような変化がおこったかに関して質的インタビューによって分析し、量的な効果検証と合わせて考察することで、地域での共食の意義を明らかにすることを目指した。

## 3. 研究の方法

### 3-1. 研究開始当初の研究計画

住民主体の2団体（京都府西京区：カルチャー遊、高知県土佐町：とんからりんの家）において新たに共食プログラムを導入し、疫学的手法を軸にその効果を検証する。

#### 【共食プログラムの実施】

各高齢者サロンにおいて、①毎週1回の昼食の共食、②年間5回の「季節の行事に合わせた共食」を、各団体のボランティアスタッフと学生との協働のもとに実施する。「季節の行事に合わせた共食」については、かつては伝統的におこなわれていた「非日常（ハレ）の食事」を再現し、高齢者サロンにおいて共に調理し、共に食べる試みである。

#### 【包括的な健康状態の評価】

共食プログラムの効果について、実施前後の高齢者の包括的健康度の評価として、主観的指標と客観的測定値を複合した下記の項目について、測定および聞き取り調査を行う。

A: 高齢者の総合機能評価における測定項目

- 1) 栄養状態・口腔機能（食多様性）
- 2) 身体機能（ADL、歩行、握力）
- 3) 心理的健康
- 4) 認知機能
- 5) 生活背景（地域のつながり、農業などの活動、食品入手）

B: 質的インタビュー：食態度、交流による心理的变化、食の伝承、地域のつながり

## 【調査地と対象者】

	介入群	非介入群	非介入群の選定（マッチング）
京都市西京区	20人	50～60人	同地域にある高齢者住宅における健診参加者
高知県土佐町	20人	50～60人	同町における年1回の健診参加者

共食プログラムへの参加者を介入群とし、非介入群との比較解析を行なう。

また、質的研究として、共食プログラムの前後において高齢者の食生活や人との交流の意識に関する聞き取りを行い、共食プログラムへの参加がどのような変化をもたらしたか、量的データと合わせて考察する。

### 3-2. COVID-19 感染症拡大以降の研究計画の変更

2019年度に本課題が採択された後、共食プログラムの実践にむけて上記2地域で準備を進めていた。各地域の住民団体とともに、予備的共食プログラムの実施や、プログラムを実施する前の食に関するニーズをとらえるインタビュー調査を実施した。しかしながら、COVID-19 感染症拡大のため、共に食べるという状況自体が、極めて困難な状況になった。

そこで、当初の計画を変更し、主に下記の3点に関する調査・研究および実践介入を実施した。1) 孤食と共食に関する状況について文献レビューや過去の調査データを活用し、整理・分析する、2) 感染症拡大下における高齢者の健康と食生活の実態の調査、3) スマートフォンを用いたバーチャルな共食の実践とその効果の検証、である。特に、感染症拡大下において高齢者が共に食事をとることは困難になったため、実践介入としては、スマートフォンのアプリケーションであるLINEを用いた「スマホ食事クラブ」の実践を計画した。この計画には、デジタル・アンソロポロジーの分野で研究実績のあるロンドン大学・文化人類学分野にも協力を依頼し、国際的な共同研究へと発展した。

## 4. 研究成果

### 4-1. 孤食と共食に関する状況の整理

孤食と共食に関する先行文献をレビューし、筆者らの過去の調査データをまとめ、共食に関する状況をまとめた。筆者らは2008年から高齢者の孤食（日常的に一人で食事をとることを調査し、孤食では食品摂取の多様性に乏しく、やせ傾向にあり、心理的健康度（QOL）が低いことを過去に報告していたが（Kimura Y, et al. 2012）、今回新たに関東・関西圏の都市部および農村部の既存データを分析し、孤食の頻度は都市部でより高く、東京都板橋区では対象の75歳の212人中41%が孤食であり、子供と同居の場合でも20%が一人で食べている実態をつかんだ。孤食の頻度は農村よりも都市部でより高いという環境因子も明らかにした（木村ら 2020）。

また、農村の調査地における共食について、広義の「食の共有」と捉えられる農作物のやり取り（おすそ分け）にも注目した分析を行った。本課題の調査地（高知県土佐町）で実施したご長寿健診の過去のデータを、農作業と作物の譲渡（おすそ分け）に着目して分析した。その結果、農作業を行ない、かつ作物を譲渡している人は、作物を譲渡していない人に比べ統計的有意に主観的幸福度、社会的役割（高次ADLの指標の一つ）のスコアが高いことが明らかになった（野瀬ら 2022）。

### 4-2. 感染症拡大下における高齢者の健康と食生活の実態の調査

COVID-19 感染症拡大下の外出自粛等の影響により、高齢者のフレイル、サルコペニアの進行が懸念されていた。世界各国からの研究により、特に高齢者の身体活動量の減少と、食習慣の悪化および食事量の減少等が報告されていた。そこで、筆者らは、本課題の調査地において、感染症の拡大による地域在住高齢者の主観的運動量および食事量変化と、ADLとの関連を明らかにすることを目的とし郵送による質問紙調査を実施した。対象は、高知県土佐町に居住の75歳以上の地域在住高齢者とし、2019年および2021年の自記式質問紙調査に回答した301人（男126／

女 175、平均 84.8 歳)である。2021 年の調査で、新型コロナウイルス感染症の拡大前に比べて、日常的な運動量に変化は感じるか、および日常的な食事量に変化は感じるかを 4 択で問い、減ったと回答したものを主観的な運動量および食事量の低下群とした。2019 年および 2021 年の基本的 ADL、TMIG-IC、および 6 か月間の体重減少の有無について自記式で問い、その変化を分析した。その結果、運動量が減少したと回答した対象者は、男性：15.9%、女性：22.9%であり、食事量が減少したと回答した者は、男性：7.9%、女性 4.6%であった。運動量が減少した者としなかった者で基本的 ADL、TMIG-IC のスコアを比較したところ、2019 年時点と 2021 年のスコアにおいて、それぞれ有意な差がみられなかった。農村地域に居住する高齢者においては、新型コロナウイルス感染症の影響による運動量および食事量の低下割合が先行研究よりも比較的少なく、実際の ADL 低下との関連は 2021 年時点では見られなかったと考えられる (木村ら 2022)。

さらに、長期縦断疫学研究 (SONIC 研究) の一環として 2020 年 8 月に兵庫県伊丹市、朝来市の地域在住高齢者 (コロナ前までの健診参加時に重症サルコペニアと診断されていない 79-81 歳) を対象に郵送調査を実施し、外出自粛期間中 (2020 年 4、5 月頃) の体力低下の状況と食生活を含めた日常生活の行動について調査を行った。結果として、「体力低下を感じた」高齢者は調査回答者 254 人中 94 人であった。そのうち、体力低下を感じた際に「予防的行動」をとることができた 21 人を対象にインタビュー調査を行い、背景要因を質的に分析した (図 1)。その結果、コロナ禍でのサルコペニア予防 (運動や食事改善) の行動にいたる背景として、高齢者の過去の経験や記憶が健康行動において重要な役割をもつことを報告した (Kimura Y, et al. 2022)

Types of Behavior	Variables	Cases
Walking	Passive walking (counting steps, measuring time, etc.) Taking a walk (around the house, in the neighborhood, etc.)	7
Exercising at home	General exercising Squats, weight training Yoga, stretching	8
Improving daily diet	Eating high-protein diet Eating three meals per day even if not hungry Eating certain foods recognized as healthy	6
Maintain daily routine	Tried to maintain a daily living Tried to continue gardening or home farming	3
Taking a good rest	Did nothing special but rested Intended to take naps during the day	2

図 1 COVID-19 感染拡大下でとった健康行動の分類

#### 4-3. バーチャルな共食の実践とその効果の検証

コロナ禍により共食は困難になったため、スマートフォンのアプリケーションである LINE を用いた「スマホ食事クラブ」の実践を、ロンドン大学・文化人類学分野との共同で行った。対象者は、土佐町の社会福祉協議会が月一回の頻度で実施している「高齢者のためのスマホ教室」の参加者 (22 人) のうち、LINE の利用ができる者のなかから、自由意志で参加を希望した 5 名とした。バーチャル共食のプログラムは、「スマホ食事クラブ」の名称のもと、LINE のグループチャットによる食事内容の共有を行うものである。参加者には、食事に関すること：食材、調理行程、食事内容、料理の紹介、食事の様子 (一緒に食べている人) など、自由に発信してもらうように依頼した。

「スマホ食事クラブ」のグループチャットには、参加者の高齢者に加え、筆者をふくむ研究者 3 名、および、社会福祉協議会の職員 2 名がスタッフとして参加した。また、本プログラムの趣旨は高齢者らが食を共有する交流に重点をおくため、スタッフらによる食事指導は行わないこととした。これによって、「良い食事内容でなければ報告しづらい」という心理的プレッシャーを回避し、共食の交流としての側面を楽しんで継続してもらえるように配慮した。介入の観察期間は 1 か月とし、その介入期間の直前と直後に同じ質問票を用いた調査、およびインタビュー調査を実施した。

結果として、一か月の介入期間の前後で、精神的健康度 (QOL など) や食態度に関する自記式アンケートと個別インタビューを実施したところ、次のような特徴や効果が明らかになった。

1) 社会とのつながりの促進  
 オンラインでの会話が実際に「食のおすそわけ」につながった例が確認された。

(図2)

2) 料理意欲の向上  
 一人暮らしの高齢者では、自分の料理を人に見せることで料理意欲が向上していた。実際に、ある参加者が投稿した料理を参考に自分も作ったという投稿もみられた。

3) 多世代交流と食の伝承への意識

スマホを通じた食の共有は、多世代交流がしやすいプラットフォームとして有効であった。調理法等を若者に伝えたいという気持ちの高まりや食の伝承を意識した発言も聞かれた。

4) 精神的な状況の変化

QOLの主観的健康度、家族関係・友人関係の満足度、幸福感が介入後に高いスコアになった参加者もみられた。他の人の料理の写真をみて「食欲がわいた」という声もきかれ、実際に食欲スコアも向上していた。



図2 スマホ食事クラブにおけるの会話の一例

このように、実施前後での高齢者の変化の分析から、バーチャルでの食の共有においても、食欲や食意欲（調理意欲等）の向上や、「おすそ分け」行為の増加などの変化がみられたことを、質的・量的調査から示した (Sasaki R, Haapio-Kirk L, Kimura Y. 2021)。

#### 4-4. 成果の総括

本研究は、現代の日本社会で減少している「地域における共食の場」の介護予防としての効用や可能性を探索した。感染症の拡大によって、高齢者の孤立や孤食がより深刻な課題となるなかで、共食の意義を多角的に再検討するうえでも本研究(感染症拡大下での高齢者の食生活の実態、食の共有の状況、バーチャル共食の効果)の分析・報告は意義のあるものであったと考える。

Kimura Y, Wada T, Okumiya K, Ishimoto Y, Matsubayashi K, et al. (2012) Eating alone among community-dwelling Japanese elderly: association with depression and food diversity. J Nutr Health Aging. 16(8), pp.728-31.

Kimura Y, Akasaka H, Takahashi T, Yasumoto S, Kamide K, Ikebe K, Kabayama M, Kasuga A, Rakugi H, Gondo Y. (2022) Factors Related to Preventive Behaviors against a Decline in Physical Fitness among Community-Dwelling Older Adults during the COVID-19 Pandemic: A Qualitative Study. Int J Environ Res Public Health. 15;19(10):6008

Sasaki L, Haapio-Kirk L, Kimura Y\*. (2021). "Sharing virtual meals among the elderly: An ethnographic and quantitative study of the role of smartphones in distanced social eating in rural Japan" Japanese Review of Cultural Anthropology 21(2), pp.1-42. (\*corresponding author)

木村友美、野瀬光弘、松林公蔵. (2020)「超高齢社会における孤食と共食—ソーシャル・インクルージョンの観点から」未来共創 7, pp.99-117.

野瀬光弘、木村友美、坂本龍太. (2022). 地域在住高齢者における農作物の取り扱いと健康度との関連性—高知県土佐町のご長寿健診から—。日本農村医学会雑誌, 71(1), 31-40.

木村友美、佐々木理世、石本恭子、藤澤道子 (2022)「食で地域と結ぶ高齢者施設—青森市と奄美市の事例から」未来共創、9号, 297-309.

木村友美、石本恭子、藤澤道子、和田泰三、野瀬光弘、加藤恵美子、竜野真維、坂本龍太、松林公蔵「地域在住高齢者における新型コロナウイルス感染症拡大に伴う運動量および食事量の変化とADLとの関連」第64回日本老年医学会学術集会(2022年6月2日、口頭発表、O-86)

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 15件／うち国際共著 2件／うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 Lise Sasaki, Laura Haapio-Kirk, Yumi Kimura	4. 巻 21
2. 論文標題 Sharing virtual meals among the elderly: An ethnographic and quantitative study of the role of smartphones in distanced social eating in rural Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Japanese Review of Cultural Anthropology	6. 最初と最後の頁 1-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14890/jrca.21.2_7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Iwasaki Masanori, Kimura Yumi, Yamaga Takayuki, Yamamoto Naomune, Ishikawa Motonao, Wada Taizo, Sakamoto Ryota, Ishimoto Yasuko, Fujisawa Michiko, Okumiya Kiyohito, Otsuka Kuniaki, Matsubayashi Kozo, Ogawa Hiroshi	4. 巻 56
2. 論文標題 A population based cross sectional study of the association between periodontitis and arterial stiffness among the older Japanese population	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Periodontal Research	6. 最初と最後の頁 423 ~ 431
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jre.12835	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Teramura Akira, Kimura Yumi, Hamada Kosuke, Ishimoto Yasuko, Kawamori Masato	4. 巻 19
2. 論文標題 COVID-19-Related Lifestyle Changes among Community-Dwelling Older Adult Day-Care Users: A Qualitative Study	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of Environmental Research and Public Health	6. 最初と最後の頁 256
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3390/ijerph19010256	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Saengrut Bumnet, Yoda Takeshi, Kimura Yumi, Ishimoto Yasuko, Rattanasathien Rujee, Saito Tatsuya, Chunjai Kanlaya, Miyamoto Kensaku, Sirimuengmoon Kawin, Pudwan Rujirat, Katsuyama Hironobu	4. 巻 19
2. 論文標題 Can Muscle Mass Be Maintained with A Simple Resistance Intervention in the Older People? A Cluster Randomized Controlled Trial in Thailand	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of Environmental Research and Public Health	6. 最初と最後の頁 140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3390/ijerph19010140	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 木村友美、佐々木理世、石本恭子、藤澤道子	4. 巻 8
2. 論文標題 食で地域と結ぶ高齢者施設 青森市と奄美市の事例から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 未来共創	6. 最初と最後の頁 297-309
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村友美、野瀬光弘、松林公蔵	4. 巻 7
2. 論文標題 超高齢社会における孤食と共食：ソーシャル・インクルージョンの観点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 未来共創	6. 最初と最後の頁 99～117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/76151	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Senoo Soichiro, Iwasaki Masanori, Kimura Yumi, Kakuta Satoko, Masaki Chihiro, Wada Taizo, Sakamoto Ryota, Ishimoto Yasuko, Fujisawa Michiko, Okumiya Kiyohito, Ansai Toshihiro, Matsubayashi Kozo, Hosokawa Ryuji	4. 巻 47
2. 論文標題 Combined effect of poor appetite and low masticatory function on sarcopenia in community dwelling Japanese adults aged 75 years: A 3 year cohort study	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Oral Rehabilitation	6. 最初と最後の頁 643～650
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/joor.12949	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Iwasaki Masanori, Kimura Yumi, Yamaga Takayuki, Yamamoto Naomune, Ishikawa Motonao, Wada Taizo, Sakamoto Ryota, Ishimoto Yasuko, Fujisawa Michiko, Okumiya Kiyohito, Otsuka Kuniaki, Matsubayashi Kozo, Ogawa Hiroshi	4. 巻 56
2. 論文標題 A population based cross sectional study of the association between periodontitis and arterial stiffness among the older Japanese population	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Periodontal Research	6. 最初と最後の頁 423～431
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jre.12835	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 Sasaki L, Haapio-Kirk L, Kimura Y	4. 巻 21
2. 論文標題 Sharing virtual meals among the elderly: An ethnographic and quantitative study of the role of smartphones in distanced social eating in rural Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Japanese Review of Cultural Anthropology	6. 最初と最後の頁 1-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimura Yumi, Iwasaki Masanori, Ishimoto Yasuko, Sasiwongsaroj Kwanchit, Sakamoto Ryota, Wada Taizo, Fujisawa Michiko, Okumiya Kiyohito, Miyazaki Hideo, Matsubayashi Kozo	4. 巻 19
2. 論文標題 Association between anorexia and poor chewing ability among community dwelling older adults in Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Geriatrics & Gerontology International	6. 最初と最後の頁 1290 ~ 1292
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/ggi.13792	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Senoo Soichiro, Iwasaki Masanori, Kimura Yumi, Kakuta Satoko, Masaki Chihiro, Wada Taizo, Sakamoto Ryota, Ishimoto Yasuko, Fujisawa Michiko, Okumiya Kiyohito, Ansai Toshihiro, Matsubayashi Kozo, Hosokawa Ryuji	4. 巻 47
2. 論文標題 Combined effect of poor appetite and low masticatory function on sarcopenia in community dwelling Japanese adults aged 75 years: A 3 year cohort study	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Oral Rehabilitation	6. 最初と最後の頁 643 ~ 650
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/joor.12949	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村友美、野瀬光弘、松林公蔵	4. 巻 7
2. 論文標題 超高齢社会における孤食と共食 ソーシャル・インクルージョンの観点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 未来共創	6. 最初と最後の頁 101 - 118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 野瀬光弘, 木村友美, 坂本龍太	4. 巻 71
2. 論文標題 地域在住高齢者における農作物の取り扱いと健康度との関連性 高知県土佐町のご長寿健診から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本農村医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 31~40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2185/jjrm.71.31	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimura Yumi, Akasaka Hiroshi, Takahashi Toshihito, Yasumoto Saori, Kamide Kei, Ikebe Kazunori, Kabayama Mai, Kasuga Ayaka, Rakugi Hiromi, Gondo Yasuyuki	4. 巻 19
2. 論文標題 Factors Related to Preventive Behaviors against a Decline in Physical Fitness among Community-Dwelling Older Adults during the COVID-19 Pandemic: A Qualitative Study	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of Environmental Research and Public Health	6. 最初と最後の頁 6008~6008
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3390/ijerph19106008	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木村友美, 石本恭子, クワンチット・サシウォンサロージ	4. 巻 48
2. 論文標題 社会・文化的観点からの「フレイル」再考 感染症拡大下における生活変化に関する日タイ比較研究から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Medical Science Digest	6. 最初と最後の頁 154-156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Wada Taizo, Ishimoto Yasuko, Hirayama Kiichi, Kato Emiko, Tatsuno Mai, Fujisawa Michiko, Kimura Yumi, Kasahara Yoriko, Fukutomi Eriko, Imai Hissei, Nakatsuka Masahiro, Nose Mitsuhiro, Iwasaki Masanori, Kakuta Satoko, Hirosaki Mayumi, Okumiya Kiyohito, Matsubayashi Kozo, Sakamoto Ryota	4. 巻 22
2. 論文標題 Older adults' preferences for and actual situations of artificial hydration and nutrition in end of life care: An 11 year follow up study in a care home	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Geriatrics Gerontology International	6. 最初と最後の頁 581~587
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/ggi.14419	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tatsuno Mai, Wada Taizo, Kato Emiko, Hirayama Kiichi, Fujisawa Michiko, Kimura Yumi, Ishimoto Yasuko, Hirosaki Mayumi, Nose Mitsuhiro, Yamada Chika, Kohori Segawa Hiromi, Kasahara Yoriko, Yamamoto Naomune, Okumiya Kiyohito, Matsubayashi Kozo, Sakamoto Ryota	4. 巻 23
2. 論文標題 Association between glucose tolerance and mortality among Japanese community dwelling older adults aged over 75?years: 12 year observation of the Tosa Longitudinal Aging Study	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Geriatrics Gerontology International	6. 最初と最後の頁 341 ~ 347
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/ggi.14572	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 木村友美、岩崎正則、石本恭子、他.
2. 発表標題 地域在住高齢者の4年後の認知機能低下と栄養・口腔機能との関連
3. 学会等名 第63回日本老年医学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木村友美、赤坂憲、高橋利土、権藤恭之、神出計、池邊一典.
2. 発表標題 コロナ禍での体力低下に対する予防行動 地域在住高齢者を対象とした質的調査から
3. 学会等名 第8回日本サルコペニア・フレイル学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yumi Kimura & Rise Sasaki
2. 発表標題 Food choices and its impact on planetary health: A discussion from a case study in Papua, Indonesia.
3. 学会等名 3re ESP Asia Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木村友美、石本恭子、和田泰三、他
2. 発表標題 地域在住高齢者の高次ADL低下とフレイルとの関連
3. 学会等名 第62回日本老年医学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 木村友美
2. 発表標題 シンポジウム2 アジア地域における比較研究にむけた食事調査の課題
3. 学会等名 第69回日本口腔衛生学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kimura Y, Ishimoto Y, Sasiwongsaroj K, Kasahara Y.
2. 発表標題 Perceptions of frailty among elderly people: A qualitative study in Japan and Thailand
3. 学会等名 The Nursing Home Research International Conference（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 木村友美、坂本龍太、和田泰三、藤澤道子、奥宮清人、石本恭子、加藤恵美子、竜野真維、岩崎正則、松林公蔵
2. 発表標題 農村地域における高齢者の食行動と健康度との関連
3. 学会等名 第61回日本老年医学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 寺村晃、木村友美、石本恭子
2. 発表標題 COVID-19が及ぼす地域在住高齢者の生活の変化 通所型サービスにおける質的調査
3. 学会等名 第80回日本公衆衛生学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木村友美、石本恭子、藤澤道子、和田泰三、野瀬光弘、加藤恵美子、竜野真維、坂本龍太、松林公蔵
2. 発表標題 地域在住高齢者における新型コロナウイルス感染症拡大に伴う運動量および食事量の変化とADLとの関連
3. 学会等名 第64回日本老年医学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yumi Kimura, Hiroshi Akasaka, Toshihito Takahashi, Saori Yasumoto.
2. 発表標題 Preventive behaviors against a decline in physical fitness during the COVID-19 pandemic: A qualitative study of community-dwelling older adults in Japan
3. 学会等名 International Conference on Frailty and Sarcopenia Research (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 栗本英世、モハーチ・ゲルゲイ、山田一憲、小野田正利、綿村英一郎、山本晃輔、木村友美、宮前良平、野坂祐子、白川千尋	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 222
3. 書名 争う(分担執筆)主食の変化にみる『争い』: インドネシア・パプア州における糖尿病の事例から	

1. 著者名 Yamamoto B, Yamanaka H, Kimura Y, Mohacsi G, Ogasawara R.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Humanistic futures of learning: perspectives from UNESCO Chairs and UNITWIN Networks	5. 総ページ数 4
3. 書名 Social design for health: Ontological vulnerability, life course and planetary health	

1. 著者名 志水 宏吉、河森 正人、栗本 英世、檜垣 立哉、モハーチ・ゲルゲイ、木村友美、藤目ゆき、山本ベバリアン、澤村信英、稲場圭信、渥美公秀、宮前良平、山崎吾郎、山本晃輔、藤高和輝	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 340
3. 書名 共生学宣言「第4章 フィールド栄養学からみた食と健康 インド・ヒマラヤ高地の遊牧民と難民を事例として」	

1. 著者名 志水 宏吉、河森 正人、栗本 英世、檜垣 立哉、モハーチ・ゲルゲイ、木村友美、藤目ゆき、山本ベバリアン、澤村信英、稲場圭信、渥美公秀、宮前良平、山崎吾郎、山本晃輔、藤高和輝	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 340
3. 書名 共生学宣言	

1. 著者名 Yumi Kimura and Yasuko Ishimoto	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Geography and Regional Research University of Vienna	5. 総ページ数 312
3. 書名 Frailty among Older Adults in Japan and Thailand: The Perspective of a Preventive Approach. ' Kwanchit Sasiwongsaroj, Karl Husa, and Helmut Wohlschl(eds.) "Migration, Ageing, Aged Care and the Covid-19 Pandemic in Asia: Case Studies from Thailand and Japan	

1. 著者名 モハーチ・ゲルゲイ、木村友美	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 517
3. 書名 「プラネタリーヘルスと食の変革 人と地球の健康から「バックループ」の実験へ」稲村哲也、山極寿一、清水展、阿部健一編著『レジリエンス人類史』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	野瀬 光弘 (Nose Mitsuhiro) (00568529)	京都大学・東南アジア地域研究研究所・連携研究員  (14301)	
研究分担者	藤澤 道子 (Fujisawa Michiko) (00456782)	京都大学・東南アジア地域研究研究所・連携准教授  (14301)	
研究分担者	笠原 順子 (Kasahara Yoriko) (40737540)	杏林大学・保健学部・講師  (32610)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------